

『岡山商大論叢』（岡山商科大学）

第40巻第3号 二〇〇五年六月

《論 説》

「近世・近代 瀬戸内芸予諸島の経済と地域の変容」

尾道石工の成立と展開

—残された石造物から—

佐藤 昭嗣

一 はじめに

中世以来瀬戸内の中心的港町として発展してきた尾道は、一七世紀における西廻り航路の整備に伴い、一大流通

拠点として一層重要性を増すこととなる。そして江戸時代中期から後期にかけて、港湾都市としての最盛期を迎える。この頃の尾道は、商品流通の中継地として機能すると同時に、町にはさまざまな職人が集住し、各種の特産品を生み出していった。なかでも錨をはじめとする鍛冶製品や、周辺の豊富な石材（花崗岩）を使った石造物は、港湾都市尾道を代表する特産品であった。ここでは、石造物製作の技術者集団、尾道石工に焦点を当て、近世における活動を概観するとともに、中世にさかのぼって、残された石造物からその成立過程を考えてみたい。

尾道石工に関しては、『新修尾道市史』以降しばらくはまとまった研究はみられなかったが、近年になって、石銘を有する近世石造物調査の進展、石工の系譜を明らかにする研究など、一定の進展がみられるようになってきた。本稿ではまず、こうした成果に導かれながら、近世尾道石工の動向を整理する。次に、尾道浦を拠点とする石工集団は、すでに一六世紀前半には存在していたことが、石造物の銘文から判明しており、最近の研究成果を含めてこのあたりの動向を整理する。さらに、鎌倉時代末以降、中世を通して普遍的に存在する五輪塔の型式変遷に注目し、その技術的ルーツを探る手がかりを求めようとするものである。

二 近世の尾道石工

(1) 文献史料から見た石工の動向

近世尾道石工の動向を知る上で最も古い記録は、寛永一五（一六三八）年の「尾道町御地詰帳¹」である。そこには、一〇軒の「いしや（石屋）」と二箇所「御石場」があり、そのうちの六軒の石屋が「かやたう大門」に集住していることが知られる。「かやたう」とは時宗の常称寺本堂（榎堂）のことで、当時、常称寺の門前が石工の集

住地となっていたようである。また「御石場」は、記述部分に「明屋敷」と記されていることから、町場に存在した石材の集積場あるいは加工場と考えられ、公的な場所として藩の管理下にあったようである。

さらに、同じく寛永年間とされる「尾道町宗門改帳⁽²⁾」には一一軒の石屋がみられ、そのうち八軒の当主が時宗寺院に寺請されていることは注目される。前述のように常称寺門前に集住することからも、石工と時宗寺院との密接な関係をうかがわせる。

以上のことから、江戸時代前期の寛永年間には、尾道に既に一〇軒から一一軒の石屋が存在し、特定の地域に集住する傾向があること、町場の公的な場所での組織的な石材の集積・加工作業が行なわれていたらしいこと、そして時宗と密接な関係をもっていることなどを知ることができる。

次に江戸時代中期になると、享保八(一七二三)年のものとされる「尾道町御年貢高⁽³⁾」に、尾道町の軒数七〇七軒、人口七〇三一人、諸職人として鍛冶屋三九軒、家大工二〇軒、船大工四軒、干物や一二軒、桶屋一六軒、畳屋七軒、紺屋一〇軒、石屋三六軒と記されており、鍛冶屋と石屋の数がぬきんで多いことがわかる。石屋の数を前述の寛永年間と単純に比較すれば、三倍以上の増加を示している。尾道では西廻り航路開設後、入港船数の増加に伴って、元禄年間から元文年間にかけて、船着場の築造、海岸線の埋め立てが相次いで行なわれた。主な工事をあげると次のようになる。⁽⁴⁾

元禄二(一六八九)年 薬師堂浜の西辺を船着きのために築出し

元禄三年 海徳寺沖八幅築出し築調

元禄三年 薬師堂浜のさらに西手、荒神堂浜を埋め立て

元禄一〇年 荒神堂浜の西隣を築出し

正徳二(一七一二)年 土堂町西端築出し

元文六(一七四二)年 住吉浜を築造

これらの工事によって、ほぼ現在の海岸線ができあがることとなるが、埋め立ての際には、築堤や石垣工事などに石工の関与は不可欠であり、この時期に石工が急増した一因と考えられる。浄土寺所蔵の安永三(一七七四)年の「紙本淡彩尾道絵屏風」をみると、海岸線にはすべて石垣が築かれ、船着場には雁木が設けられている。また、町の背後の山麓から山腹に建ち並ぶ多数の寺社にも堅固な石垣が描かれ、この頃の尾道町一帯での石工の活躍を物語っている。

江戸時代後期に編纂された『芸藩通史』「物産」の項には「市中石工多し、當町近地より多く好石を出す。これを以、鳥居、燈籠、手水鉢種々の物を造る。」とあり、尾道石工の製品は、当時、尾道を代表する産物として知られていたようである。尾道市立図書館所蔵の文化四(一八〇七)年「尾道町絵図」には、常称寺門前から西國寺参道入り口の間「石屋町」の町名がみられ、⁵⁾この頃には、西国街道に沿って石屋が集まる職人町が形成されていた。寛永一五年の「尾道町御地詰帳」にみた常称寺門前への六軒の石屋の集住が、その後継続的に発展していった様子がうかがわれる。

ところで一口に石工といっても、石材の切り出し、石積み、細工物・墓碑の製作など、その活動の範囲は広い。石工はそれぞれに専門分野をもち、組織的な活動を展開していたと推測されるが、残念ながら現在のところ文献史料からは詳細を知ることができない。そこで石工銘を有する石造物から、近世尾道石工の細工物の分野での動向

を、近年の研究成果にもとづいて探ってみることとする。

(2) 石造物にみる石工の動向

日本観光文化研究所が行なった尾道の寺社の奉納石造物悉皆調査では、鳥居・手水鉢・燈籠・狛犬・玉垣・社寺号碑・注連柱・門柱・百度石・香炉・花立・供養塔・石碑など六八五基が報告されている。⁽⁶⁾ 一部に中世の石塔や近・現代のものが含まれているが、このうち紀年銘のあるものだけでも、三一七基が近世の製品である。詳しくは報告書を参照されたいが、江戸時代だけで述べ六九人の石工の名がみられ、多種多様な作品を残していることがわかる。これらの細工物のうち、鳥居と燈籠は江戸時代前期の一六五〇年代に出現し、元禄年間を境に次第に種類と数を増しながら、一八世紀後半から一九世紀前半にピークを迎える。中でも一九世紀前半には社寺号碑・門柱・花立を除く全種類が出揃い、石工銘を刻む作品が急増するようである。

このうち最も早いものとして、亀山八幡神社の万治二(一六五九)年の石鳥居(図1)には、「奉造立石(華表) 八幡宮御寶前」・「施主當町中大工石屋与七郎小工石屋助六石屋中」とあり、また良神社の万治三年の石鳥居には、「奉造立石華表良



図1 亀山八幡神社万治2年銘石鳥居

神明御寶前」・「大工石屋新右衛門當町中石屋十人」と記されている。これらの銘文からは、万治年間の尾道で十人（軒）の石屋が組合的な結束をもっていたことが推測され、石工の職階を表すものとして「大工」・「小工」など中世以来の呼称が用いられていることが知られる。おそらく「大工」の指揮のもと共同で製作・奉納されたのであろう。龜山八幡神社の境内には尾道石工の信仰を集める高御倉神社があり、文化一五（一八一八）年には「石工手間中」によって燈籠一対が奉納されている。こうした職業神ともいべき古社の信仰を精神的支柱として、石工集団の結束がはかられていたものと考えられる。

一八世紀後半以降、急増する石造物の石工銘には、単に「石工」と表記される場合がほとんどで、需要の増加に応じて広く一般の石工が単独で細工物の製作に関わり始めている様子がうかがわれる。江戸時代後期の『芸藩通史』にみたように、石造物が尾道の代表的産品としてあげられるようになる歴史的経緯の一端を示している。

一方、一九世紀に入ると鳥居・手水鉢・燈籠・狛犬など、高度な彫成技術を要する製作者として「石工棟梁」・「棟梁石工」・「棟梁」を名乗る石工が散見される。これは一七世紀までの製品にみられた「大工」（尾道の奉納石造物の銘でみる限り「大工」の呼称は浄土寺の元禄六（一六九三）年の鳥居にある「大工 忠□善吉」を最後とする）の地位に相当するもので、石工のリーダー的存在と考えられるが、「大工」の呼称が、木造建築技術者（番匠）に限定されていく過程を示す興味深い事例である。ちなみに、江戸時代中期の製品には「石大工」の呼称が散見される。

次に周辺地域に目を向けると、尾道市の東に隣接する福山市域を中心とした上田靖士氏の研究がある。⁷⁾この地域では尾道石工の作例として一七世紀のもの二基、一八世紀のもの一〇基、一九世紀の幕末までのもの三八基が報告されている。一九世紀に入ると地元の鞆石工・福山石工・津之郷石工の活動が活発化するが、これらを総合しても

三四基であり、石工銘を刻む優秀な作品については、やはり尾道石工が人気を博していたようである。

印南敏秀氏による三原市域の研究によると、石工銘を有する二八基の近世石造物のうち、一八基が尾道石工によるもので、一七世紀後半のもの四基、一九世紀の幕末までのもの一四基がある。一九世紀に入る頃には今治石工の作例も見られるが、地元三原の石工銘が登場するのは一八四〇年代末のことである。

そのほか、各地に分布する近世尾道石工の作例が断片的ながら次第に知られるようになってきた。管見による限り、広島県南半部を中心に芸予諸島とその周辺部、さらに日本海沿岸の山口県・島根県・鳥取県・富山県・新潟県にその作例がみられる。日本海沿岸の所在地はいずれも港町とその周辺であり、寛文一二（一六七二）年、河村瑞賢によって整備されたとされる西廻り航路の要所の神社に奉納されたものである。鳥居・石橋・狛犬・燈籠と種類は豊富で、鳥取市加露神社の寛政一二（一八〇〇）年の燈籠のように、北前船で商いする尾道の商人が奉納したものもあるが、新潟県佐渡市白川権現社の安永二（一七七三）年の鳥居と石橋のように、地元の船主が尾道から石材と石工を運び、造立寄進した例もある。記録によれば石工に支払った鳥居の製作経費は銀三三二匁、完成に際し村中や船持に福年餅を五個づつ配って祝っている。石橋は念仏橋と称し、本場の御影石（花崗岩）製の橋として珍重されたようである。島根県温泉町龍御前神社の享保一六（一七三一）年銘の鳥居は、尾道石工の作品が日本海沿岸にもたらされた最も早い事例である。

さて、これまで石工銘が刻まれた石造物から近世尾道石工の活動の一端をみてきたが、一八世紀以降多くの石工の名前が登場するにもかかわらず、その系譜と組織、活動の実態はほとんど明らかにされてこなかった。近年、是光吉基氏の研究¹⁰によって、この方面の解明にひとつの道筋が示された。氏は石造物に刻まれた石工銘から山根（屋）系・山城（屋）系・宮地系・石野（屋）系・川崎系・島屋系・明屋（明石）系・幸八系・近江（屋）系・道

種系など屋号から導かれる一〇グループを抽出し、屋号が不明で名だけが記される市介・弁助・幸兵衛・久四郎・喜右衛門など七〇余名の石工を確認している。そしてこの中から山根（屋）系石工に注目し、江戸時代前期の寛永年間から幕末まで、尾道を拠点に活躍した石工の系譜を明らかにした。このグループは一貫して山根源四郎を通名としている（平三郎・重三郎を名乗るものが一名ずつ含まれる）が、同時期にこの名を名乗る複数の石工が共存していることから、一子相伝的な襲名ではなく、一族あるいは師弟関係の間で並行して名乗られていたものと考えられている。ちなみに、前述した寛永年間の「尾道町御地詰帳」・「尾道町宗門改帳」からは「かやたう大門」（時宗の常称寺門前）に住む「いしや源四郎」が妻子ともに「びしゃもん」に寺請けされていることが知られる。「びしゃもん」とは時宗西郷寺の末寺「毘沙門堂」のことで、慶安から天保までの一三代にわたる山根（屋）の本家筋と思われる墓碑が、西郷寺墓地に残されているとのことである。江戸時代を通じて時宗と密接に関わった石工の姿をここにもみることができよう。

三 尾道石工銘の登場

これまで、江戸時代を通じた尾道石工の動向を文献史料と石造物からみてきたが、中世末の一六世紀、すでに尾道浦を拠点に活動した石工の存在が知られている。すべて石造物の銘文によるが、その最も古いものとして、愛媛県松山市道後公園に保存されている享祿四（一五三一）年の湯釜（花崗岩製 図2）がある。

直径一六六・七cm、高さ一五七・六cmの円筒形で、上下二段に分れ、上面をドーム状に造っている。内部は刳り貫かれ、上段正面には光背状の突出部を造り出し、前面に蓮華座に座す薬師如来像を半肉彫りしている。頂部には

別石で造られた宝珠が置かれ、そこには「南無阿弥陀仏」の六字名号が三文字づつ四行にわたって、二度繰り返して刻まれている。宝珠下端の四方は半円形に抉られて、湯釜内に溜まった湯がここからあふれ出るしくみになっている。この湯釜は、一八九四（明治二七）年、現在の道後温泉本館が新築されるまで使用されていたといわれる。

湯釜の天井部から側面には、薬師像の向かって右側から計一六行にわたる銘文が左回りに刻まれている。一三行目までは、当時の伊予国守護河野通直をたたえ、さらに温泉の由来・効験を記し、最後の三行には、

願主柳原左衛門尉

大工備後尾道芥河之□□重

享祿四天^辛卯小春如意珠曰

とあり、紀年銘の行が最終行となっている。柳原左衛門尉が願主となり、尾道石工によって享祿四年に製作された湯釜と理解することができる。⁽¹¹⁾石工銘にみえる「芥河」は尾道浦の小地名と思われるが、尾道浦のどの地点であるかは明らかにできない。もしそうであるとすれば、この銘を「尾道芥河に住む□□重」と解することができるであろう。

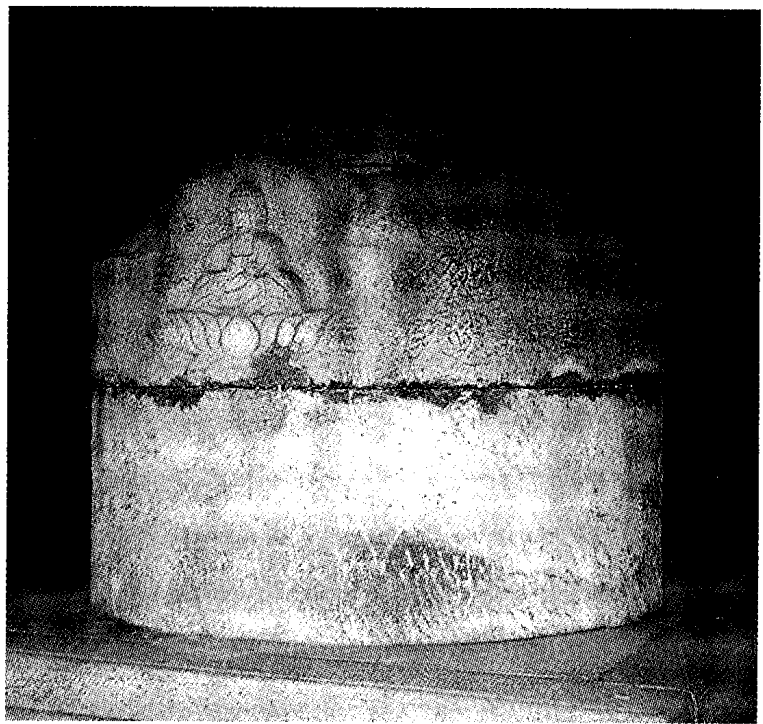


図2 享祿4年銘湯釜

る。ちなみに、宝珠の六字名号は時宗の開祖、一遍上人が刻んだとの伝承をもつ。⁽¹²⁾もちろん伝承に過ぎないが、一遍伝承(時宗)と尾道石工の関わりという点で注意しておく必要がある。

これに続いて、備後南部の府中市から福山市新市町一带に、尾道石工銘を刻んだ一六世紀代の花崗岩製石造物が集中して見出される。すなわち天文九(一五四〇)年の新市町

宮内地蔵堂石燈籠(銘「大工尾道住八郎兵衛」)、天文一一(一五四二)年の府中市常福寺八角手水鉢(銘「尾道住大工左衛門」 図3)、天文二二(一五五二)年の新市町吉備津神社(備後一宮)本殿向拝の基壇縁石(銘「大工尾道之住左衛門次郎作」)、元龜三(一五七二)年の新市町吉備津神社三重層塔(銘「大工尾道忠昌□□□□」)などである。吉備津神社本殿の基壇縁石の例は、細工物のみならず木造建造物の基礎・修景工事にも、この時期の尾道石工が関与していたことを示す事例である。

これらのなかで特に注目されるのは、八角手水鉢である。平面八角形に成形された水鉢の外面には、稜線を鏝とした八葉の蓮弁とその間に間弁がレリーフされている。鉢は台石と角柱(竿部)の上に据えられ、竿部の四隅を弓状に挟り込んでいる。石工銘は無いが、同様の形態的特徴をもつものが、天文二四(一五五五)年の府中市青目寺八角手水鉢をはじめ、新市町絹織地蔵八角手水鉢、同吉備津神社八角手水鉢、同十二神社(吉備津神社境内)八角

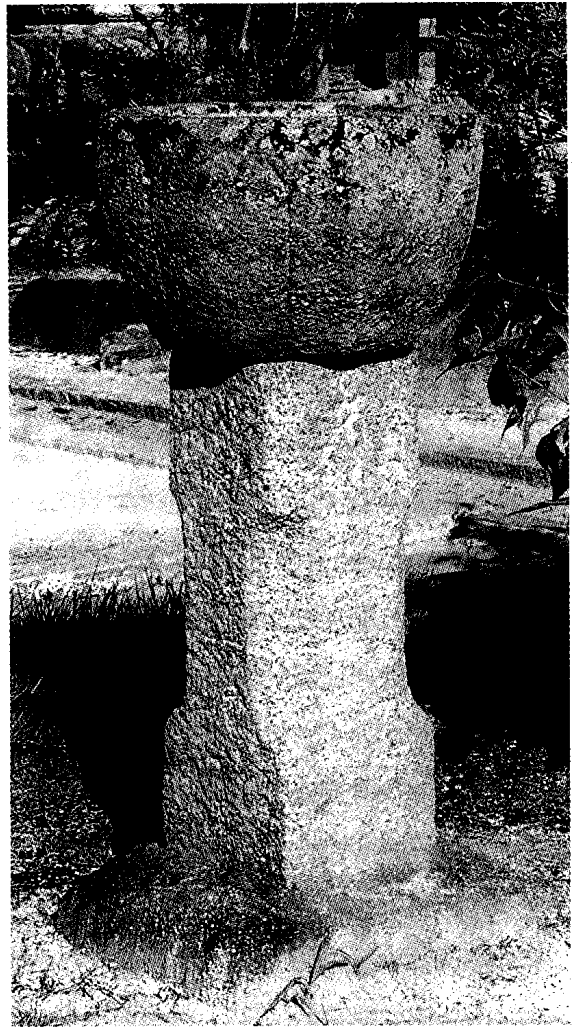


図3 常福寺八角手水鉢

手水鉢、同大山祇神社（吉備津神社境内）手水鉢残欠（竿部）、同医王院地藏堂八角手水鉢、同荒神社阿弥陀堂八角手水鉢、同素盞鳴神社手水鉢残欠（竿部）など、やはり府中市から新市町にかけて集中的に分布している。岡山県境に近い深安郡神辺町国分寺本堂前の八角手水鉢も、小型ながら同様の特徴をもち、一連の製品と考えられる。吉備津神社か十二神社の手水鉢いずれかには「天正七（一五七九）年」の銘があったとされ、これらの特異な八角手水鉢は、天文年間から天正年間にかけて、尾道石工によって製作された一連の製品である可能性が高い。⁽¹³⁾

以上のことから、一六世紀の段階で尾道を拠点とする石工が、少なくとも備後南部から伊予にかけて継続的に活動していることが確認できる。この時期の石造物に名を刻んだ石工は、すべて「大工」を称しており、彼らが配下の石工を指揮して製作に当たるといふ組織的な生産体制が存在していた様子がうかがわれる。このことは江戸時代前期の奉納石造物にみられる「大工」・「小工」・「石屋中」など近世尾道石工の組織形態につながる先駆的体制が、一六世紀の段階ですでに成立していた可能性を示唆している。江戸時代後期の著作であるが、『知新集』巻之四「尾道町」の項に、「文禄の頃尾道浦より大工石工来り居宅を造作し所々普請出来ける故、尾道町と名つけし由⁽¹⁴⁾」とあり、一六世紀末の毛利輝元による広島城築城に際して、尾道から石工が移住し、広島城下に集住した様子を伝えている。こうした伝承も一六世紀を通じた尾道石工集団の技術的・組織的成熟を考慮に入れば、十分うなづけるものではなからうか。

さてこの時期に、石材加工の専門集団が尾道に定着していた背景としては、一般には地元で産出される良質で豊富な石材（花崗岩）、瀬戸内有数の港湾都市として発展を続ける地元での需要、海運を介した他地域からの需要への対応と製品運搬の利便性などが考えられるが、今ひとつ、硬い花崗岩を自在に加工する彫成技術の系譜が問題となる。この高度な技術が一朝一夕に確立されたとは考えがたい。享祿四年銘の湯釜などにみるごとく、一六世紀の

早い段階から自分たちの本拠地を明確に「尾道」と称していることは、こうした技術が、さらに古くからこの地で育まれてきた可能性を推測させる。そこで次章からは、中世前期にさかのぼって、残された石造物からその技術的系譜を探ってみることにする。

四 中世芸予諸島域における花崗岩製石造物の出現と石工

ここではまず、芸予諸島とその周辺地域に目を広げ、花崗岩彫成技術の導入過程を考えてみたい。

この地域における鎌倉時代の石造物は、主に凝灰岩製である。愛媛県松山市周辺の石材を用いた石塔が、伊予一円はもとより、山陽側でも西は周防から東は備中の沿岸部を中心に分布している。⁽¹⁵⁾ 山陽側では一三世紀中頃から一四世紀初頭の五輪塔が最も多く、層塔がそれに次ぐ。そして一四世紀前半までは少数ながらこれらの製品が搬入されているようである。

一方、鎌倉時代後期には、一部で花崗岩製の石塔や石仏が出現する。⁽¹⁶⁾ 紀年銘をもつ初期のものとして福山市鞆町弁天島の文永八(一二七一)年銘九重層塔、尾道市浄土寺の弘安元(一二七八)年銘宝塔、府中市青目寺の正応五(一二九二)年銘七重層塔、広島県豊田郡瀬戸田町(生口島)光明坊の永仁二(一二九四)年銘十三重層塔と、その脇に置かれた永仁六(一二九八)年銘石塔残欠、三原市宗光寺の(永仁)二(一二九四)年銘七重層塔、三原市佐木島の正安二(一二三〇)年銘割石(和霊石)地藏磨崖仏、今治市附属寺の正和元(一二三二)年銘石塔残欠⁽¹⁷⁾ (層塔か宝篋印塔の塔身)、愛媛県越智郡大三島町大山祇神社の文保二(一二三二)年銘宝篋印塔⁽¹⁸⁾、三原市米山寺の元応元(一二三九)年銘宝篋印塔(図4)などがあり、出現期の花崗岩製石造物の多くが、層塔とやや下って宝

篋印塔で占められていることがわかる。このうち浄土寺の宝塔には「大工形（刑）部安光」、宗光寺の七重層塔と光明坊の石塔残欠には「大工心阿」、佐木島の割石地藏磨崖仏、大山祇神社宝篋印塔、附属寺石塔残欠と米山寺宝篋印塔には、それぞれ「佛師念心」「大工法橋念心」「大工念心」の石工銘が刻まれている。また、紀年銘はないが三原市万性寺の宝篋印塔残欠（塔身）にも「大工念心」の銘がみられる。

最初期の「形（刑）部安光」については、

浄土寺宝塔以外に手がかりがないが、「心阿」に関しては、これらの他に但馬（兵庫県）鷲原寺の永仁四（一二九六）年銘不動石仏、相模（神奈川県）箱根山中の正安二（一三〇〇）年追銘宝篋印塔、同鎌倉市安養院の徳治三（一二三〇）年銘宝篋印塔など、瀬戸内から関東に及ぶ広範囲に作例が残されており、製作年が近接していることから同一人物と考えられている。また関東の作例には、鎌倉極楽寺の住持である忍性との関係も指摘され、大和（西大寺ならびに鎌倉極楽寺を拠点とした西大寺流律宗に組織された石工と考えられている。¹⁹⁾

一方「念心」については、上記のほかには今のところ作例はなく、一四世紀初頭の二〇年間にわたって、芸予諸島島嶼部から三原市・今治市にかけて足跡を残している。一定期間この地域を中心に活動した石工と考えられる

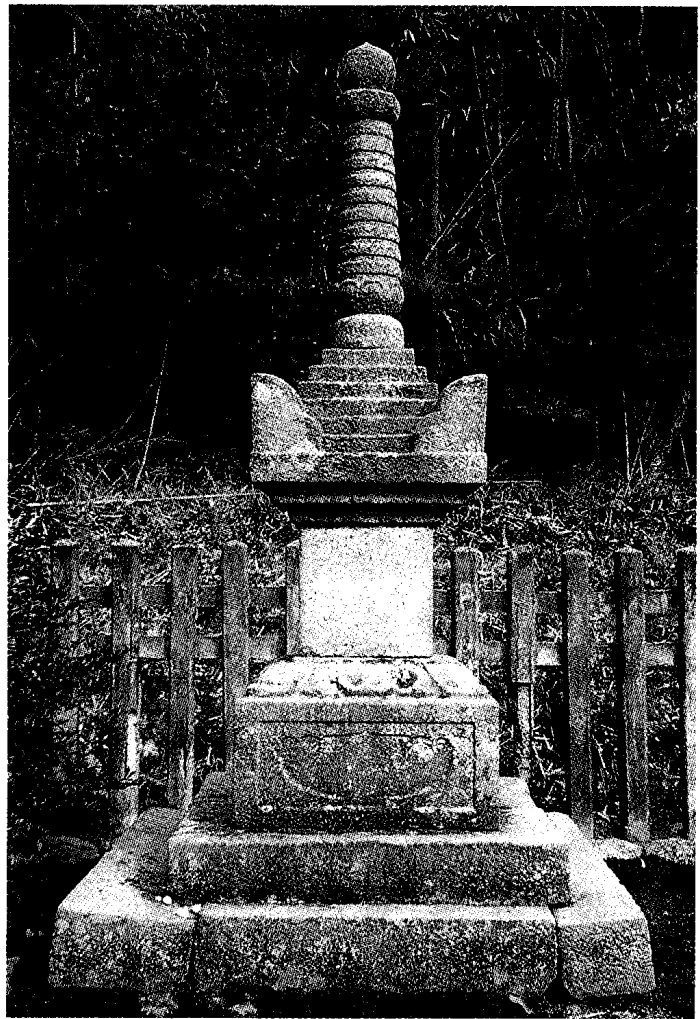


図4 米山寺元応元年銘宝篋印塔

が、その根拠地は明らかでない。活動時期の中心が心阿に若干遅れ、「心」が通字であることから、心阿とは師弟あるいは父子の関係にあるのではないかとの推測もある。⁽²⁰⁾

そもそも中世において、花崗岩のような硬い石材を精緻に加工する技術は、鎌倉時代初頭の東大寺再建に際して導入された宋人石工・伊行末などの中国宋代の石切技術に負うものとされている。やがてその技術は大和を中心とした畿内に定着し、優れた技術をもった石工集団として活動を展開した。これらの技術者集団を最も広範に組織したのが、勧進による造寺・造塔や土木事業に手腕を発揮した西大寺流律宗教団である。⁽²¹⁾ 叡尊・忍性の主導により、戒律復興を宗教的柱としながら広く社会事業をも展開した西大寺流律宗教団は、北条氏と密接に結びついて、交通路の整備や交易活動にも関与し、叡尊没後も瀬戸内をはじめとする西国への教線拡大を図っていった。芸予諸島とその周辺地域に残る初期花崗岩製石造物の多くは、こうした律僧の活動と深く関わっており、前述の割石地藏磨崖仏には北条氏一族が願主となって、周囲一町四方を殺生禁断の地としたことが記されている。また、大山祇神社の神宮寺は鎌倉極楽寺の僧と関係があり、⁽²²⁾ 生口島光明坊の十三重層塔は忍性造立の伝承をもつなど、「心阿」銘石塔の存在と相俟って西大寺系石工による石切技術の導入をうかがうことができる。⁽²³⁾ しかし、大和を本拠とするこの時期の石工集団は、基本的にはいまだ地方への定着性は乏しく、需要に応じて広範囲に移動しつつ活動していたものと思われる。

前述の「念心」を、三原あるいは尾道を拠点として活動した石工とする説があるが、⁽²⁴⁾ 銘を残す限られた作品の分布のみで、その当否を判断することはむずかしい。ただ、「心阿」と「念心」が作品を残した一三世紀末から一四世紀初頭を境に、以後この地域に花崗岩製石造物が定着し、普遍性をもつてくることは確かである。今治市とその周辺地域、そして対岸の尾道市・三原市・世羅郡域を中心に、「心阿」・「念心」以後、鎌倉末から南北朝期にか

けて、宝篋印塔と五輪塔の造立を主体とした、共通の石造文化圏が形成されていたことは、既に石造美術の分野などから指摘されている。⁽²⁵⁾それは伊予型と称される独特の様式をもつ宝篋印塔の分布、繰形座と称される台座をもつた五輪塔の分布で特徴づけられることが多い。この地域が一四世紀初頭の「念心」の活動範囲と重なることは、巨視的にみれば共通の技術的系譜に基づく石造文化圏との考えにも十分うなずける。しかし詳細に観察すれば、細部の特徴は決して一様ではなく、鎌倉末以降、より小範囲での地域差が現れ始めることがうかがわれる。

その一例として、筆者はかつて、芸予諸島域における花崗岩製五輪塔の出現とその後の展開を実測調査に基づいて検討し、尾道を中心とした地域に一三二〇年代以降、きわめて特徴的な形態の五輪塔が、一四世紀を通じて継続的に造立されていることを指摘した。⁽²⁶⁾これは尾道石工の成立を考える上で一つの手がかりを提供するものではないかと考えられる。そこで、この時の考察をもとに、尾道地域の中世五輪塔に的を絞って、あらためてそのルーツと型式学的変遷を考えてみることにする。

五 五輪塔に見る技術の系譜

(1) 花崗岩製大型五輪塔の出現

尾道地域で花崗岩製五輪塔の造立が本格化するのには、一四世紀第2四半期以降のようである。初現期の五輪塔は塔高二〇〇cmを越す大型で、一五世紀以降、総じて小型化することは、花崗岩製五輪塔の一般的傾向と合致している。紀年銘のあるものはごくまれで、正確な造立年代を把握するのは困難であるが、前述のように実測図に基づいた型式学的分析を基礎に、造立経緯が推測できるものは、そこから導かれる年代観を参考にし、まず、一四世紀

代の五輪塔の形態的特徴と変遷過程をみていくこととする。この段階の五輪塔で造立当初の組み合わせを保つ具体的事例を挙げると次のようになる。

①尾道浄土寺定証墓五輪塔（図5）

浄土寺中興の祖・定証の墓と伝えられる五輪塔は、浄土寺境内の北、観音堂（現本堂）と阿弥陀堂背後の山腹にあり、破損が著しいため従来はあまり注目されてこなかった。寺では「歴代住職の墓」とも伝えられており、地輪には大きく「累代／先住／俱会一處」と隷書体で刻まれている。しかし、浄土寺所蔵の宝曆七（一七五七）年『備後州尾道轉法輪山大乘律院莊嚴浄土寺伽藍境内図』には同じ位置に五輪塔が描かれ、一定證上人墓」と朱書きされていることから、江戸時代中期にはこの五輪塔が定証の墓と認識されていたことは明らかである。

定証墓五輪塔は現在二重の基壇上に南面して立ち、下成基壇は六七五cm四方、二段の階段状に切石を廻らし上面は石敷となっている。下段の縁石には四隅と東・西・北辺の中央に方形のほぞ穴があり、ここに柱を立て、上屋を有していたものと思われる。この下成基壇は石質や築造法から後世の築成と思われるが、前述の宝曆七年の境内図には既に描かれており、それ以前の築成であろう。

上成基壇は五輪塔と同質の花崗岩で造られた壇上積基壇で、五輪塔造立当初のものと考えられる。現在はこの壇上積基壇上に宝形造り棧瓦葺きの上屋が建てられ、壁板は四九本の五輪板卒塔婆を玉垣状に立て並べたものである。上成基壇は一辺三九七・一cmの方形で、高さは下成基壇上面から五四・八cm、側面は東石で三区に区画され、上面はタタキである。

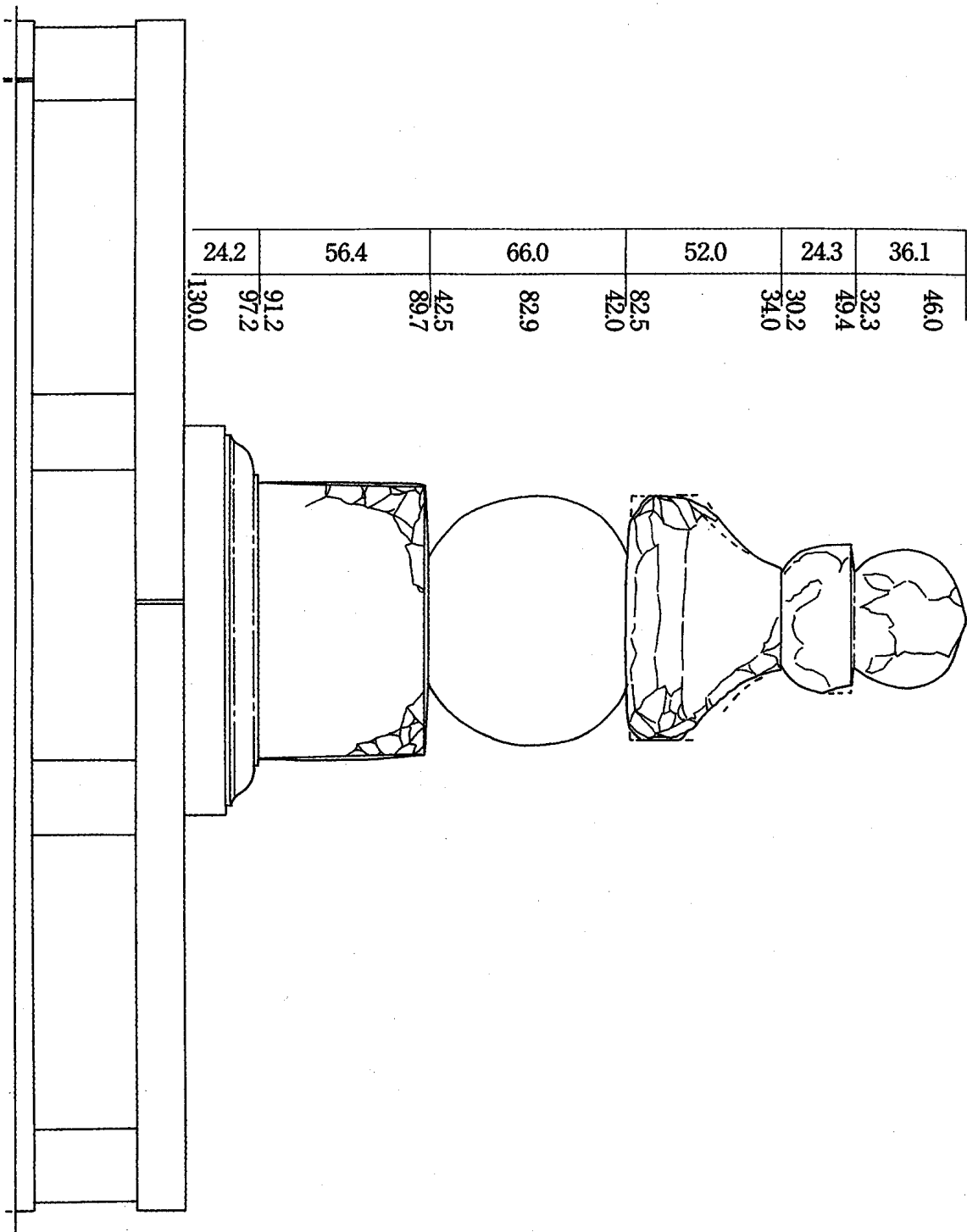


図 5 定証墓五輪塔・上成基壇実測図
(1/30、単位は cm)

五輪塔は上成基壇のほぼ中央に据えられ、線形座を有する。台座を含めた総高二五九cm、地輪から空輪までの塔高二三四・八cm（空輪頂部が欠損、欠損部は二cm程度と推定）である。火を受けており、地輪、火輪、風・空輪の破損が著しい。上成基壇の化粧石も同様に火を受けており、旧覆屋の火災によるものと推定される。火災による損傷以外、保存状態は極めてよく、一時期露座の状態にあったとしても、永らく覆屋内にあったことを思わせる。上成基壇以上の各部の計測値は図5に示した。

この五輪塔の形態的特徴として特記しておきたいことは次の通りである。一、線形座を有し、梵字は刻まれていない。二、地輪が裾広がり、側面がわずかに台形を呈し、胴張りがみられる。上面には顕著な水垂勾配が造り出されている。三、火輪幅と水輪幅はほぼ同じであるが、水輪幅がやや上回る傾向にある。四、火輪の軒は損傷が激しく四隅はすべて欠損しているが、わずかな残存部でほぼ垂直の立ち上がりを確認できる。火輪下面の反りはほとんどなく、四隅を強く反らせるタイプと思われる。五、彫成技術は高く、極めて精巧な造りである。六、地輪南面（正面）に「累代／先住／俱会一處」と隷書体で刻まれているが、後世の追刻と思われる。七、火災による破損が著しく、後世の追刻銘があるものの、五輪塔自体は明らかに鎌倉様式を備えたものである。

②今高野山塔の岡五輪塔（図6）

広島県世羅郡世羅町の今高野山龍華寺境内、塔の岡とよばれる小丘上に所在する。ここには、元亨三（一二三三）年、久代了信によって木造多宝塔が建立されたとされ、寺伝ではこの五輪塔を「願主（久代了信）の墓」と伝える。自然石を積んだ塚状の高まりに立つが、近年別石で塚を覆ってしまう整備がなされ、塚の状況

は観察できなくなっている。塔は花崗岩製で、

繰形座をもつ大型五輪塔である。総高二三二・五cm、塔高二一三・〇cm。地輪は裾の広がるタイプで、幅は上辺七九・〇cm、下辺八二・〇cm、高さ五三・〇cm、である。上面には高低差一cmの水垂勾配を有する。水輪は幅七四・〇cm、高さ五九・〇cmで、やや肩が張る。火輪は軒がゆるやかに反り、四隅の反りを強調している。

幅七〇・〇cm、高さ四五・五cmを測る。風・空輪は一石で作り、全体の高さ五五・五cm、風輪幅四三・〇cm、高さ二三・〇cm、空輪幅三八・〇cm、高さ三一・五cmである。風輪は下半部がたつぷりとした曲線を描き、空輪下半は丸みが少なく、伸びやかに立ち上がっている。繰形座は前後二石からなり、幅一一八・〇cm、上辺八八・〇cmで、繰形は豊かな曲線を描いている。石材は良質で風化も少なく、彫成も丁寧である。

③西國寺三重塔脇五輪塔(図7)

尾道市西久保町の西國寺境内の最高所、永享元(一四二九)年建立の木造三重塔の北東脇にある、総高二九〇cmを越す花崗岩製の大型五輪塔である。瀬戸内地域最大規模の五輪塔で、前後二石からなる繰形座の上に乗った、重量感あふれる姿は壮観である。繰形座は一辺二四六・〇cm、高さ二二・〇cm以上(周囲に敷石がめぐり、下端が確認できない)で、ゆるやかに反転する繰形が作り出されている。

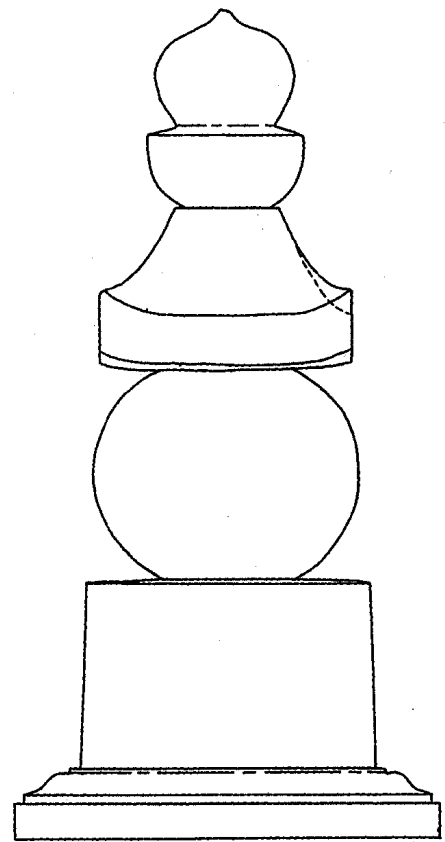


図6 今高野山塔の岡五輪塔実測図(1/30)

五輪塔本体の高さ（塔高）は二六九・〇cm、地輪は裾が広がって安定感があり、側面を台形に作っている。地輪幅は上辺が九六・〇cm、下辺が一〇二・〇cm、高さ六六・五cmで、地輪上面にはやや丸みをもって傾斜した高低差一・五cmの水垂勾配がみられる。水輪はやや肩が張り、幅九二・五cm、高さ七一・五cmである。火輪は幅八四・〇cm、高さ五四・〇cmで、軒端はほぼ垂直に立ち上がり、隅部を強く反らしている。風・空輪は一石で彫成され、全体の高さは七七・〇cmと水輪の高さを上回り、風輪幅五七・八cm、高さ三三・〇cm、空輪幅五一・二cm、高さ四四・〇cmを測る。風輪下半部はたつぷりとした曲線を描き、空輪は安定感ある宝珠形である。

④福善寺墓地五輪塔（図8）

尾道市長江一丁目に所在する福善寺の裏山墓地に、ほぼ同形・同大の花崗岩製大型五輪塔が二基、東面して南北に並んでいる。二基とも前後に二石を組み合わせた繰形座をもち、それぞれ南塔・北塔と仮称することとする。福善寺は寛永七（一六三〇）年にこの地に移転した寺で、墓地は西國寺山から南へ、尾道水道に向かっ

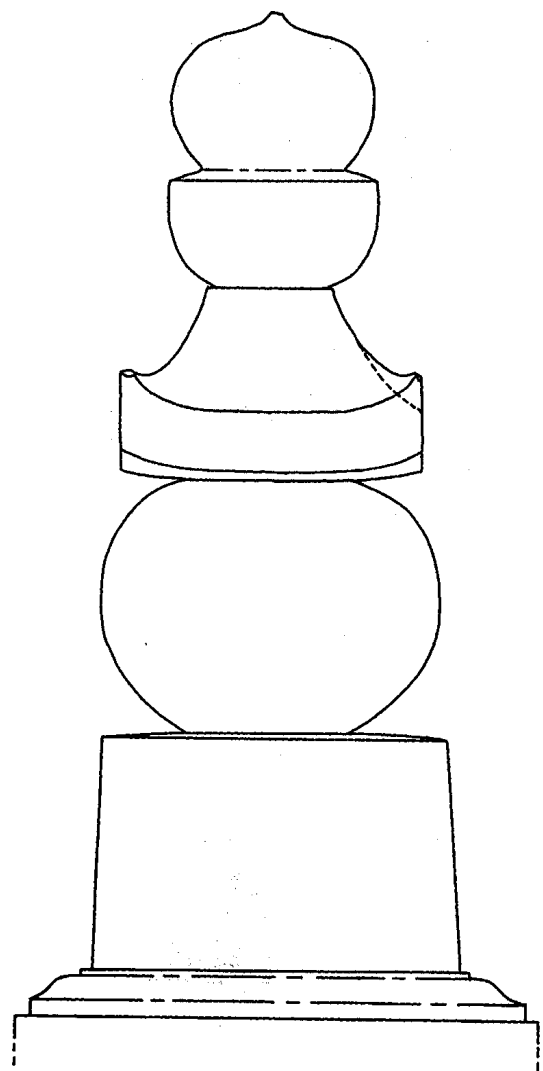
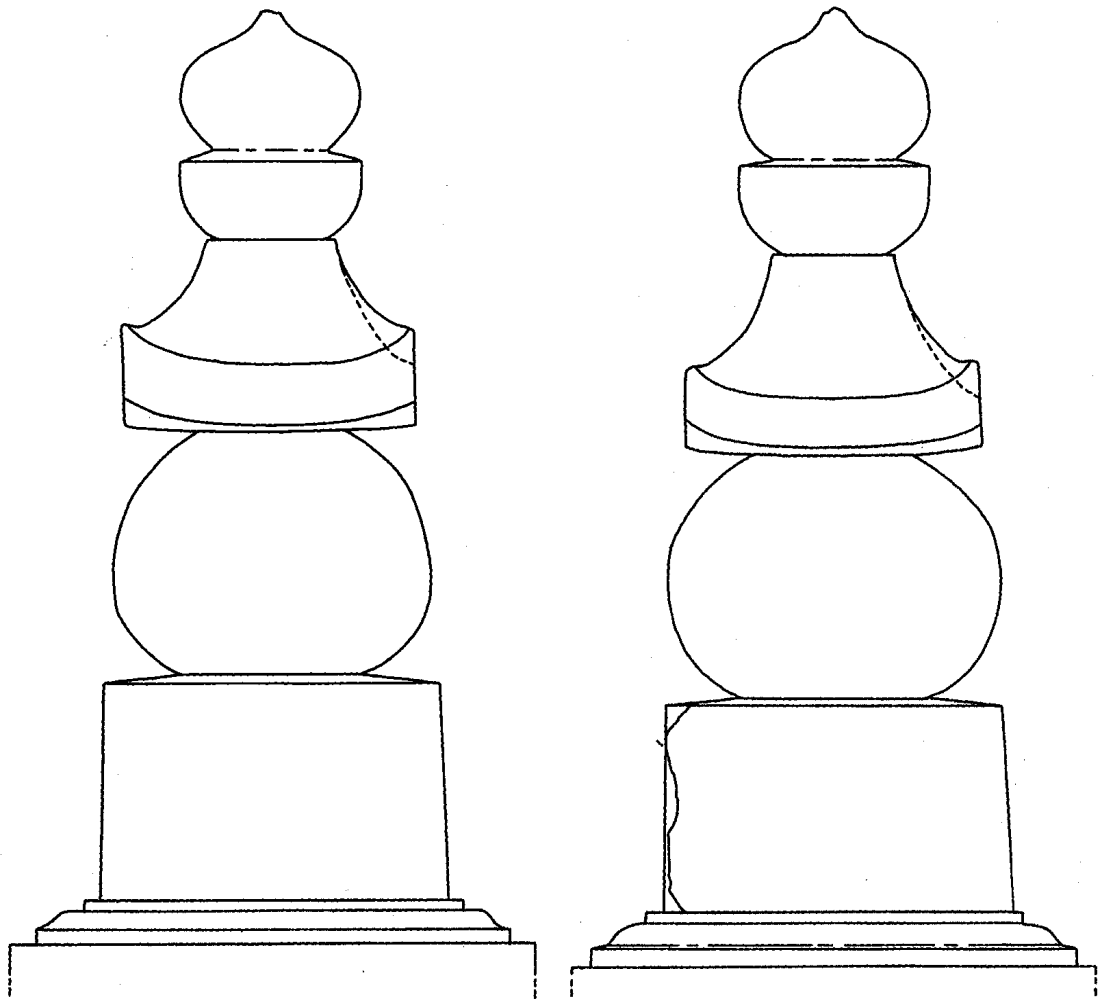


図7 西國寺三重塔脇五輪塔実測図 (1/30)

て伸びる丘陵上に広がり、江戸時代後期から現代までの墓碑が密集している。この一帯は時宗の丹花寺跡と伝えられ、また寺伝によると中世には丹花城があり、二基の五輪塔は城主持倉則秀・則保父子の墓とされている。しかし五輪塔は明らかに一四世紀に遡るものであり、中世末から近世初頭とされる持倉父子伝承とは合致しない。両塔は明治中頃まで、現在地よりやや南に寄った地点、眼下に尾道水道を望み、東西に中世尾道浦の中心である坊地・長江の入江を一望できる場所にあったが、山陽鉄道（現JR山陽線）の建設に伴って、現在の位置に移設されたという。

南塔は総高二六七cm以上、繰形座を除いた塔高は二四六・〇cmである。地



南塔

北塔

図8 福善寺墓地五輪塔実測図(1/30)

輪は裾が広がって安定感があり、側面が台形を呈している。幅は上辺で九四・〇cm、下辺で九七・〇cm、高さ六二・五cm、上面に高低差一・五cmの水垂勾配がある。水輪は下膨れで、幅八八・五cm、高さ六八・〇cmを測る。火輪は全体に反りが強く、幅八二・〇cm、高さ五二・〇cmである。風・空輪は一石で彫成され、全体の高さは六三・五cm、風輪幅五〇・五cm、高さ二四・五cm、空輪幅四九・〇cm、高さ三九・〇cmを測る。風輪は低めで、空輪も横に強く張って扁平気味である。繰形座は幅一四六・〇cm、上辺一〇五・〇cm、高さ二二cm以上（下端が土に埋まって計測不能）で、中段に繰形が彫成されている。

北塔は総高二六八・五cm以上、塔高は二五一・〇cmである。地輪はやはり裾が広がり、幅は上辺で九二・〇cm、下辺で九五・五cm、高さ六〇・〇cm、上面に高低差二・〇cmの水垂勾配がある。水輪はやや下膨れ気味であるが、南塔ほど顕著ではない。幅九一・〇cm、高さ六七・〇cmを測る。火輪は高く、軒の四隅が強く反り、幅八二・〇cm、高さ五五・〇cmである。風・空輪は一石で彫成され、全体の高さ六九・〇cmで水輪高より高い。風輪幅五二・〇cm、高さ四七・〇cm、空輪幅五一・〇cm、高さ四二・〇cmである。繰形座は南塔と同寸であるが、繰形の彫りがやや硬い。

両塔は西國寺三重塔脇五輪塔に次ぐ規模で、繰形座や地輪の形態など共通する特徴を有するが、西國寺塔に比べて石質が劣り、彫成もやや雑な印象を受ける。

⑤光明寺墓地五輪塔（図9）

尾道市東土堂町にある光明寺（浄土宗西山禅林寺派）境内の墓地に、歴代住職の墓とされる花崗岩製の

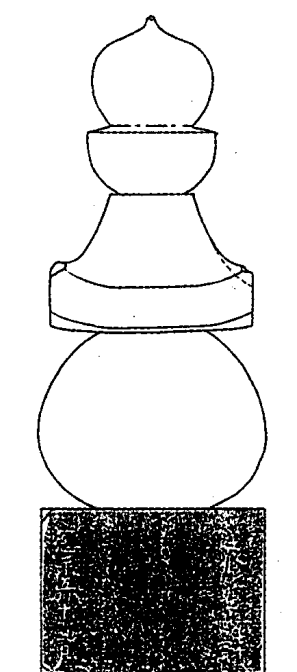


図9 光明寺墓地五輪塔実測図（1/30）

大型五輪塔が五基、東面して南北に並んでいる。その内、南側の四基は慶長七（一六〇二）年から宝永元（一七〇四）年に至る近世のもので、北端の一基には地輪に「逆修 聖海^{七十}／應永五^{戊寅}十一二日」の銘がある。ここではこの応永五（一三九八）年銘五輪塔を取り上げる。

この五輪塔は花崗岩切石の基壇上に立ち、基壇を含めた総高一九六・五cm以上（基壇下部は埋没している）、塔高一八五・五cmである。基壇の幅は七九・〇cmで、石質や風化の度合いから当初のものと考えられる。地輪は高く、裾の広がりはなく、側面長方形である。地輪幅六二・〇cm、高さ四七・〇cm、上面は平坦で水垂勾配はみられない。水輪は大きく、下膨れで、幅六二・五cm、高さ五〇・〇cm、水輪幅が地輪幅を上回っている。火輪は幅五五・五cm、高さ三八・五cmで、軒は全体がゆるやかに反り、四隅の反りが強調されている。風・空輪は一石で彫成され、全体の高さ五〇・〇cm、風輪幅三五・五cm、高さ一九・五cm、空輪幅三三・〇cm、高さ三〇・五cmを測る。風輪は下半部の張りが弱くなり、空輪は基部が太く形の崩れがうかがわれる。全体に彫成が粗雑で、石質も低下している。

以上、尾道地域における初期花崗岩製五輪塔の実態を紹介したが、いずれも塔高一八〇cm以上、大きいもので二七〇cm近くに及ぶ大型で、一四世紀代までの花崗岩製五輪塔の一般的傾向に合致している。これらの五輪塔の詳細な検討と年代観については別稿を参照されたいが、ここでは若干重複するが、形態的特徴から導かれる地域色について要点を述べてみたい。

①の定証墓五輪塔は実測調査の結果、大和西大寺奥之院の叡尊墓五輪塔を細部の比率に至るまで七割に縮小して設計され、裾広がりや上面に明瞭な水垂勾配を造り出すという叡尊塔特有の地輪の形態まで厳密に踏襲した、畿内

を含めた同時期の五輪塔のなかでも特異な存在であることが判明している。繰形座に据えられている点も同様である。叡尊塔に比べて火輪を小さく造る傾向があるが、これは今治市や松山市一带を含めて、芸予諸島周辺地域の花崗岩製五輪塔全般にみられる傾向で、出現当初からの地域色といえるかもしれない。備後・伊予ともに、以後この傾向をより強めていくようである。いずれにしても、叡尊墓五輪塔を細部に至るまで直接のモデルとして造立された稀有な例であることは間違いなく、叡尊あるいは西大寺流律宗と直接かつ密接な関係をもつ人物の意志が、強く働いていることを推測させる。

定証は叡尊の直弟子で、嘉元四（一三〇六）年に浄土寺の再興を果たし、瀬戸内に於ける西大寺流律宗の拠点とした人物である。この時記された「定証起請文」には、定証の叡尊に対する尊崇の念がありありと読み取れる。寺伝によると嘉暦二（一三二七）年六月二四日、九一歳で入寂。現存する木造多宝塔（国宝）は元徳元（一三二九）年六月四日、定証の三回忌に合わせて落慶供養が営まれたと伝えられる。定証墓の五輪塔と壇上積基壇の化粧石、そして多宝塔四面の石段に用いられた花崗岩には、肉眼での観察による限りでは色調や雲母粒子の形状・密度などに共通の特徴が認められ、これら三者は境内に多数存在する他の花崗岩製品の石質とは著しい相違をみせている。このことは定証墓の築造が木造多宝塔の再建（嘉暦二年起工）と並行して進められた可能性を示唆しており、五輪塔の造立年代は定証没年に極めて近いものと考えられる。彫成技術の巧みさからも、西大寺流配下の大和系石工によるものである⁽²⁷⁾。

次に、②④で紹介した四基は、定証墓五輪塔以後、一四世紀代を通じて造立されたと考えられるものである。ここで注目されるのは、これら四基がいずれも定証墓五輪塔の形態的特徴を基本的に継承しながら推移していくことである。すなわち共通に繰形座をもち、地輪を裾広がり造り、地輪上面には四辺に向かって傾斜する明瞭な水

垂勾配を造り出している。しかし定証墓五輪塔を単に写すのではなく、次第にデフォルメを加えながら地域色を強めていく。地輪の裾広がりは一層強調され、側面観は明確に台形を示すようになる。また地輪が相対的に高くなり、火輪幅が縮小し、風・空輪が巨大化する。石質も次第に悪くなり、彫成技術の低下が目立つようになる。この変化を具体的にたどると、②の今高野山塔の岡五輪塔は地輪の高さが増し、火輪の幅が縮小するものの、他の部分は定証墓五輪塔をほぼ九割に縮小して作られおり、最も近い年代が与えられる。それに次ぐものが③の西國寺三重塔脇五輪塔である。この段階では風・空輪が巨大化し、その総高が水輪高を上回るようになる。他の部分の比率も定証墓五輪塔との関連性は希薄となり、火輪の反りを強調するなど、より独自性を強めている。この傾向を引き継ぐのが福善寺墓地五輪塔二基（なかでも北塔）で、さらに二基とも石質と彫成技術の低下が顕著である。こうした変遷の先に、応永五（一三九八）年造立の⑤光明寺墓地五輪塔が出現すると考えている。ここでは水輪幅が地輪幅を上回って形の崩れは一層進み、地輪の側面観は一般的な長方形となり、繰形座はみられない。

このように、尾道地域では定証墓の造立を契機として、その後、特に地輪の形態に独自色をもつ五輪塔が、一四世紀第二四半期から光明寺五輪塔が示す一四世紀末までの間、継続的に作られていることが判明した。ちなみに、一連の石造文化圏と考えられている対岸の今治市一帯にも、この時期、花崗岩製大型五輪塔が集中して造立されている。⁽²⁸⁾ここでは繰形座をもつものがあること、火輪幅を水輪幅より小さめに作ることなど、尾道地域との共通性もみられるが、地輪は一貫して側面長方形に作られた一般的な形態で、水垂勾配も顕著ではない。五輪塔を見る限り、尾道地域の特異性は明らかであり、このことは尾道に独自の型式が出現し始めていることを示唆しているものと考ええる。

(2) 一五・一六世紀における五輪塔の変遷

次に、一四世紀末頃と推察される大型五輪塔を最古として、現代まで歴代の墓塔が並ぶ尾道西國寺住職墓地五輪塔群⁽²⁹⁾(全て花崗岩製)から、一五・一六世紀の五輪塔の変遷をみてみよう。

西國寺境内の最高所、三重塔区の西側下段の住職墓地には、中世から現代に至る歴代住職の墓塔が南面して南北二列に並んでいる。墓地東半部の後列に並ぶ一三基の五輪塔(仮に西から順に①〜⑬とする)は大半が中世のものと思われ、近世の住職墓はほとんどが地輪に没年と法名が刻まれ、前列に並べられている。後列の一三基は各部の組み合わせが入れ替わり、本来の組み合わせを保つものはほとんどなく、誰の墓塔であるかも伝承されていない。ただ、西端の最も大きな一基だけは規模・形態・梵字などの特徴から、当初の組み合わせを保っていると思われる。また精査の結果、二基の地輪に中世末の住職銘や紀年銘が見出されたことから、これらを手がかりに中世の住職墓塔の検討を進めてみたい。

まず本来の組み合わせを留める五輪塔①(図10)は、台座を含めた総高一八〇cm、地輪から上の塔高一六二・二cm、塔本体は幅七三・〇cmの繰形座の上に乗る、地輪幅は上辺五五・〇cm、下辺五五・五cm、高さ四二・二cm、上面には明瞭な水垂勾配がある。各輪の四面には、五大四門の種字が刻まれている。地輪の裾がわずかに広がっており、水垂勾配を有する丁寧な作りであること、繰形座の採用、風・空輪が大きく水輪高を上回ること等、前代の西國寺三重塔脇五輪塔・福善寺墓地五輪塔などの特徴を受け継ぎながらも、地輪が相対的に高くなり、塔身がスリム化する傾向がみられ、光明寺墓地永五(一三九

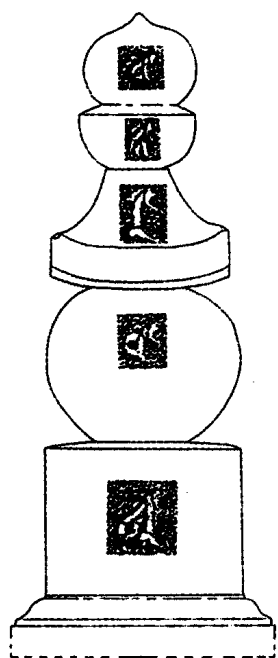


図10 住五実
寺地①
國墓塔
西職輪測
(1/30)

八) 年銘五輪塔に限りなく近い特徴も見受けられる。光明寺塔にはすでに地輪の裾広がりはみられず、石質や加工技術の低下が明らかで、住職墓地五輪塔①は型式上その直前の段階と考えられ、南北朝時代末に位置付ける事ができる。

以後、この墓地の五輪塔は急速に小型化が進む。これは一五世紀以降の一般的な傾向であり、数が激増すると同時に石質・加工技術の低下と小型化が進み、再び大型化するのとは近世に入ってからである。ここでも同様の傾向がみられ、たやすく積み直しができることから、本来の組み合わせを保ちにくく、規模も画一化されており、原状に復元することは極めて困難である。よって他の一二基は地輪の特徴に注目し、いくつかの傾向を探ってみることにする。

各五輪塔の地輪の寸法と比率、諸特徴を表したのが表1である。一般に時期が下るほど地輪高の地輪幅に対する比率が大きくなる(地輪が相対的に高くなる)といわれるが、あくまでも長い時間幅での傾向であって、この表を見る限りばらつきが大きく、これだけでは一定の傾向は見出せない。ここではむしろ墓地内最古の五輪塔①の構成要素から、梵字の有無と配置ならびに彫り方、地輪上面の水垂勾配の有無に注目するのが適当かと思われる。(図11)

地輪に梵字を配するものは五輪塔①を含めて八基ある。その内四面に刻むもの六基、一面のみに刻むもの二基である。一面のみに刻むものには「浄遍」(五輪塔⑧)・「宥忍」(五輪塔⑦)の銘があり、五輪塔⑦にはさらに「弘治三年／三月十五日／逆修」とあり、逆修塔であることから弘治三(一五五五)年の造立と考えてよい。ちなみに西國寺所蔵の「代々先師録」によれば浄遍は西國寺第二〇代、宥忍は第二二代住職で、いずれも没年は不明である。

表1 西國寺住職墓地五輪塔地輪一覽

番号	地輪高 (cm)	地輪幅 (cm)	地輪高： 地輪幅	特 徴
①	42.5	55.0	0.77	四面に梵字 水垂勾配 線形座
②	42.0	47.5	0.88	水垂勾配 線形座
③	41.5	46.2	0.90	四面に梵字 水垂勾配
④	35.0	40.2	0.87	四面に梵字 水垂勾配
⑤	30.5	40.5	0.75	四面に梵字 水垂勾配
⑥	34.5	36.5	0.95	
⑦	28.0	36.5	0.77	南面に梵字 (銘)弘治三年/三月十五日/宥忍/逆修
⑧	29.5	36.0	0.82	南面に梵字 (銘) 浄遍
⑨	32.5	37.8	0.86	四面に梵字
⑩	30.5	36.0	0.85	水垂勾配
⑪	28.5	34.0	0.84	
⑫	24.0	35.0	0.69	水垂勾配
⑬	32.5	38.0	0.86	四面に梵字

梵字を四面に刻むことは五輪塔①ですで行われており、中世に一般的にみられるものでもあり、五輪塔⑦・⑧に先行すると考えられる。五輪塔①は鎌倉期のものに比べれば小さく華奢な書体であるが、彫りは葉研彫りの雰囲気を残し、地輪の中央に刻まれている。これに次第に退化しながら五輪塔③・⑤が続き、五輪塔④では一層小さく、彫りも丸彫りになり、四面に梵字を刻んだ最終段階の五輪塔⑨・⑬は、線彫り状のものへと退化していく。梵字が刻まれる位置も次第に地輪上半部へと移動し、五輪塔⑦・⑧の段階でその下に銘が刻まれるようになる。五輪塔⑦・⑧の刻字パターンは当墓地前列に並ぶ近世以降の墓塔に受け継がれていく。

一方、水垂勾配をもつ地輪は七基、その内の四基が四面に梵字を配し、しかも比較的古いタイプの梵字に伴っている。五輪塔②には梵字はないが、線形座を有し、裾広がり地輪であることから、五輪塔①に次ぐ時期と考えられる。こうしてみるとこの墓地の五輪塔

は、三重塔脇五輪塔など一四世紀段階での尾道地域特有の特徴を、部分的ではあれ伝統的に受け継ぎながら変遷していることがわかる。

四面に配した梵字が最も退化する五輪塔⑨・⑩から⑧・⑦の浄遍・宥忍塔の段階には水垂勾配は消失するが、それは宥忍塔の年代から考えて一六世紀段階でのことと思われる。なお一三基の中には、以上のほか水垂勾配をもつが梵字のないものが二基(⑩・⑫)、水垂勾配・梵字のいずれもないものが二基(⑥・⑪)存在する。このうち五輪塔⑫は地輪幅に対する地輪高の比が、一三基の中では飛び抜けて小さく(地輪が相対的に低い)、明らかに古様を残しているが、残る三基の位置付けは明らかでない。ただ、ここでは触

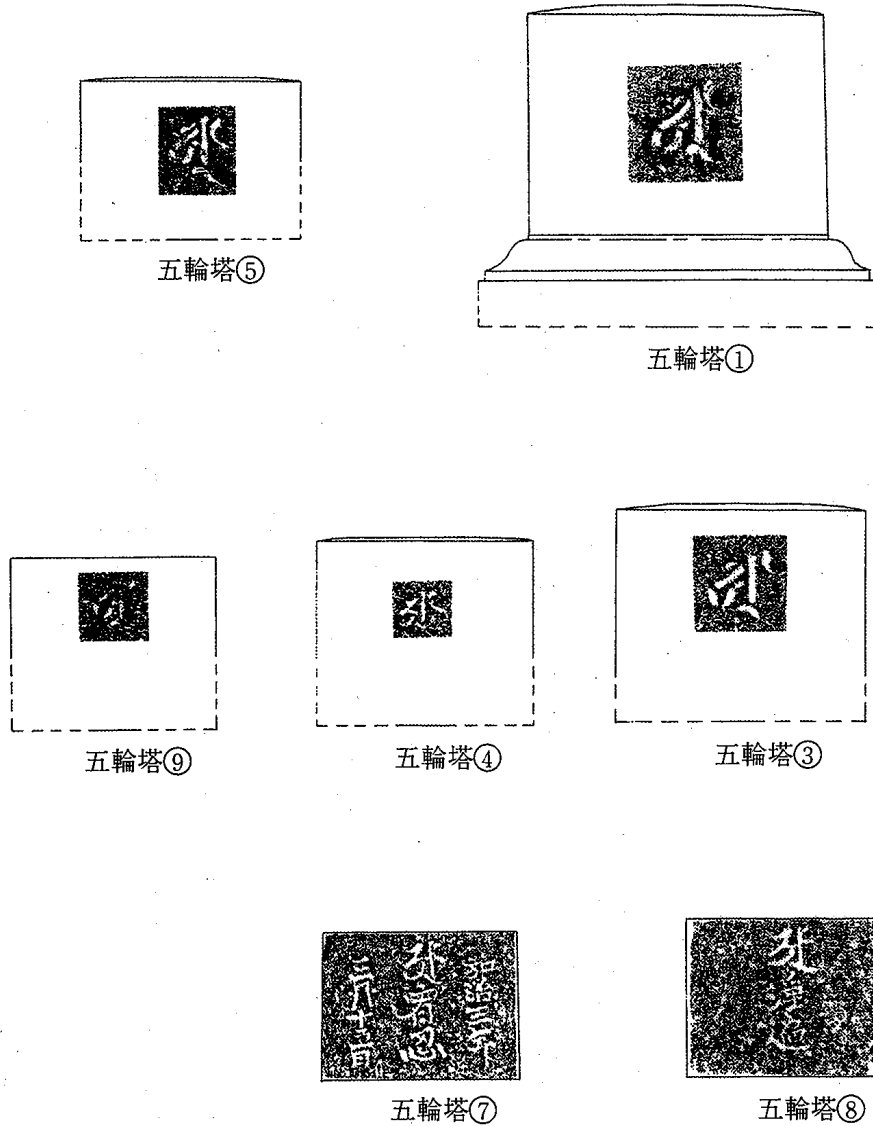


図11 西國寺住職墓地五輪塔地輪実測図 (1/20)

れなかったが、火輪のなかに軒隅が上に向かって強く屈曲し、明らかに近世初頭まで下るものが三基あり、三基の地輪はこれらに伴う可能性が高い。五輪塔⑩には水垂勾配があり古様を留めるようにもみえるが、元和八（一六二二）年に没した（「代々先師録」による）第二三代成遍の五輪塔以後、水垂勾配が復活している（⑩と同様梵字はない）ものがあることから、矛盾はないと考える。

以上の分析から、歴代住職墓後列一三基のうち一〇基は中世の五輪塔であり、型式学的にもほぼ一貫した型式連続がたどれることが明らかとなった。このうち最も新しい型式である二基は浄遍・宥忍塔で、逆修塔である宥忍塔から弘治三（一五五五）年という年代を押しさえることができる。このように一連の型式連続が認められることは、西國寺住職墓地五輪塔群は、一五世紀から一六世紀中頃にかけて一定の技術的系譜のもとで継続的に制作されたものであることを示唆している。同様の小型花崗岩製五輪塔の残欠は、西國寺に限らず市街地をとりまく寺院墓地では数多く見出すことができ、需要の増加と安定した生産体制の確立をうかがわせる。

浄遍・宥忍塔が造立された一六世紀前半から中頃は、松山市道後公園の享祿四（一五三一）年銘湯釜を初めとした作例にみられるように、「尾道に住む石工」を名乗り、製品に名を刻む石工が登場した時期と明らかに重なっているのである。

五 まとめ

以上述べてきたことから、尾道石工の成立過程を整理して、まとめたい。

まず、石造物に刻まれた石工銘に明らかに「尾道の石工」を名乗る人物が登場するのは、一六世紀前半、享祿四

(一五三二)年のことである。以後一六世紀を通じて、八角手水鉢という特異な製品など、芦田川中流域に残る石工銘を有する石造物から、尾道石工の継続的な活動を確認することができた。

この流れは江戸時代前期、寛永年間の文献に散見され、その多くが時宗寺院である常称寺門前に集住する「いしや」につながる可能性が高いと考える。そのなかの「源四郎」を名乗る一統は、幕末まで代々「山根源四郎」を名乗り、父子あるいは師弟関係のなかで、その系譜を一貫して継承しており、近世尾道石工のありようの一端を示している。また、万治二(一六五九)の亀山八幡宮奉納石鳥居にみた「大工」「小工」「石屋中」の銘は、大工を中心に組織された石工集団の存在を示している。一六世紀代の石工銘にも、すべて「大工」と記されており、この体制は尾道において、少なくとも十六世紀前半にさかのぼるものと考えられる。

次に、尾道石工が扱う石材の全てが、地元で豊富に産出される花崗岩であったという前提から、この地とその周辺地域における花崗岩彫成技術の系譜をたどると、鎌倉時代の一二七〇年代以降、特に一二九〇年代後半から一三一〇年代にかけて、集中的に花崗岩製石造物が造立されるようになり、これを契機に従来からの凝灰岩製品にかわって花崗岩製品が定着していく様子がうかがわれた。この時期の主要な石造物を製作した心阿と念心は、大和西大寺や鎌倉極楽寺を拠点とした西大寺流律宗配下の石工と考えられており、西大寺流律宗の瀬戸内地域への展開が、高度な技術を要する花崗岩彫成技術がこの地域にもたらされる重要な契機となったと思われる。しかし、心阿は瀬戸内から関東に至る広い範囲で活動した形跡があり、念心も芸予諸島とその両岸に足跡を残すものの、地域への定着性についてはいまだ確証はない。

そこで、中世を通じて普遍的に存在する花崗岩製五輪塔に注目し、型式学的分析を通じて製作技術の連続性に迫ってみた。尾道地域における花崗岩製五輪塔の鏑矢とも言えるのは浄土寺の定証墓五輪塔である。この五輪塔は

定証の死没直後の一三二〇年代末の造立で、大和西大寺奥之院の叡尊墓五輪塔を七割に縮小した相似形をなし、細部に至るまで共通した形態的特徴を有する特異なものである。なかでも線形座と称する台座と、裾広がり度上面に明瞭な水垂勾配を造り出す地輪の形態は、独自のデフォルムを加えながら一四世紀を通じて尾道地域の五輪塔に継承される。これは他地域に例をみない、この地域独特の型式であり、明らかに地域色の発露とみなすことができる。

さらに、西國寺住職墓地五輪塔の分析を通して、一四世紀末から一六世紀中頃までの五輪塔に一連の型式連続が認められた。この内の最古のものには、前述の地域色がいまだ名残を留めており、定証墓五輪塔以来の技術的系譜を引きながら変遷していく様子がうかがわれる。一方、この型式連続のなかで最も新しい宥忍塔が示す年代は、尾道石工の名が明確な形で姿を現す一六世紀前半から中頃に完全にリンクしている。このことから、その後江戸時代を通じて発展の一途をたどる尾道石工の技術的系譜の一端は、花崗岩製五輪塔の変遷からみる限り、少なくとも一四世紀前半の鎌倉時代末から南北朝時代初頭にさかのぼり、一貫した連続性をもって展開した可能性が指摘できる。技術の連続性は、石工集団の定着と一定の継続的活動を示しているものと考えられる。

鎌倉時代末から南北朝時代にかけての尾道は、瀬戸内有数の港湾都市として急速に拡大・発展したと考えられている。³⁰同時に、都市の外郭には浄土寺（律宗）・光明寺（浄土宗）・常称寺（時宗）・西郷（江）寺（時宗）・天寧寺（臨濟宗）・西國寺（真言宗）など主要寺院の造営・再建が相次いだ。一帯に花崗岩製石造物が本格的に出現した当初は、一三世紀末の木工「心阿」の作例から定証墓五輪塔に至る経緯でみたように、西大寺系石工など畿内からの技術導入があったであろうが、造寺・造塔をはじめ、都市建設に不可欠の石切技術が、こうした背景のなかでこの地域に、いち早く定着していったことは十分想定できることである。

以上、尾道石工のルーツについて探ってきたが、これは主として五輪塔の分析による綱渡りの試みであり、あくまでも現段階での予察である。尾道とその周辺地域には、中世を通じて他にも多様な花崗岩製石造物が残されており、これらを総合的に分析することによって、石工集団の成立過程を、より詳細に跡付けていくことが今後の課題である。

注

- (1) 青木 茂『新修尾道市史』第二卷 尾道市役所 一九七二年八月
 (2) 青木 茂『新修尾道市史』第二卷 尾道市役所 一九七二年八月
 (3) 青木 茂『新修尾道市史』第三卷 尾道市役所 一九七三年一月
 (4) 青木 茂『新修尾道市史』第三卷 尾道市役所 一九七三年一月
 谷沢 明「絵図に探る尾道の町並み景観」(『日本観光文化研究所研究紀要』一〇 近畿日本ツーリスト株式会社日本観光文化研究所 一九八九年二月)
 (5) 谷沢 明「絵図に探る尾道の町並み景観」(『日本観光文化研究所研究紀要』一〇 近畿日本ツーリスト株式会社日本観光文化研究所 一九八九年二月)
 (6) 沖田 憲・亀井好恵・河邊一郎「尾道の石造奉納物」(『日本観光文化研究所研究紀要』一〇 近畿日本ツーリスト株式会社日本観光文化研究所 一九八九年二月)
 (7) 上田靖士『ふるさと研究ノート 備南の風土記』二〇〇〇年一月
 (8) 印南敏秀「第十四章 信仰」(『三原市史』第七卷民俗編 三原市役所 一九七九年九月)
 (9) 青木 茂『新修尾道市史』第四卷 尾道市役所 一九七五年三月
 (10) 是光吉基「備後国尾道石工の研究―特に山根(屋)系の石工について―」(『坂詰秀一先生還暦記念 考古学の諸相』 坂詰秀一先生還暦記念会 一九九六年一月)
 (11) この湯釜の銘文について触れた主な文献として、
 青木 茂『新修尾道市史』第四卷 尾道市役所 一九七五年三月
 「道後温泉」編集委員会『道後温泉 増補版』松山市観光協会 一九八二年三月

松山市史料集編集委員会『松山市史料集』第二巻 松山市役所 一九八七年四月

『愛媛の文化財』愛媛県教育委員会 一九九三年

がある。これら四つの文献は、ここで問題とした最後の三行について、文字の解読と有無、行の配列と順序がいずれも異なっており、情報が錯綜している。本文に記した字句と順序は筆者が現地調査で改めて確認したものである。詳細は省くが、ここで特に重要な石工銘については、しばしば引用される『新修尾道市史』第四巻の「石工備後尾道住□阿」の記述は明らかに誤りであることを指摘しておく。文献に関する情報と現地調査については梅木健一氏のお世話になった。

(12) 『愛媛県の文化財』愛媛県教育委員会 一九九三年

(13) 蔵橋純海夫「二 石造物」(新市町史編纂委員会『新市町史』通史編 広島県芦品郡新市町 二〇〇二年一月)

府中市常福寺八角手水鉢の製作年代については、府中市教育委員会に保管される拓本をはじめとする調査記録と筆者の現地調査によって、本文のとおり修正した。調査記録の実見については、下津間康夫氏のお世話になった。

(14) 『新修広島市史』第六巻 広島市役所 一九九九年三月

(15) 森 章「四国の五輪塔の系譜(伊予の白石の五輪塔)」(『史迹と美術』第六九〇号 一九九八年一月)

(16) ここで取り上げた石造物はさまざまな機会に紹介されているが、ここでは特に注を付さない場合は主に次の文献によっている。

三原市史民俗編調査班『三原市の石造物』三原市役所 一九七九年

是光吉基「芸備地方における中世石造物の研究」(河合正治編『瀬戸内海地域の宗教と文化』雄山閣 一九七六年二月)

(17) 愛媛県教育委員会文化財保護課「しまなみ水軍浪漫のみち文化財調査報告書―石造物編―」愛媛県教育委員会 二〇〇二年三月

(18) 松岡 進『大三島を中心とする芸予叢島史』愛媛県越智郡大三島町宮浦小学校 一九五五年 二月

(19) 三原市史民俗編調査班『三原市の石造物』三原市役所 一九七九年

是光吉基「芸備地方における中世石造物の研究」(河合正治編『瀬戸内海地域の宗教と文化』雄山閣 一九七六年二月)

(20) 三原市史民俗編調査班『三原市の石造物』三原市役所 一九七九年

(21) 川勝政太郎『日本石材工芸史』綜藝社 一九五七年一月

藤沢典彦「律と石」(『叡尊・忍性と律宗系集団』大和古中近研究会 二〇〇〇年三月)

(22) 松岡 進『大三島を中心とする芸予叢島史』愛媛県越智郡大三島町宮浦小学校 一九五五年 二月

(23) 河合正治「西大寺律宗の伝播―瀬戸内海地域を中心として―」(『金澤文庫研究』一四八号 一九六八年七月)

中尾 堯「備州における勧進聖の系譜」(河合正治編『瀬戸内海地域の宗教と文化』雄山閣 一九七六年二月)

(24) 三原市史民俗編調査班『三原市の石造物』三原市役所 一九七九年

(25) 三原市史民俗編調査班『三原市の石造物』三原市役所 一九七九年九月

藤沢典彦「律と石」(『叡尊・忍性と律宗系集団』大和市中近研究会 二〇〇〇年三月)

(26) 佐藤昭嗣「芸予諸島ならびに周辺地域の中世五輪塔―安芸・備後の花崗岩製五輪塔を中心として―」(『岡山商大社会総合研究所

報』第二三号 二〇〇二年一〇月)

- (27) 佐藤昭嗣「尾道浄土寺伝定証上人墓の再検討」(『考古論集—河瀬正利先生退官記念論文集』 二〇〇四年三月)
- (28) 「愛媛の文化財」 愛媛県教育委員会 一九九三年
 (財)元興寺文化財研究所「五輪塔の研究—平成六年度調査概要報告—」 一九九五年三月
 愛媛県教育委員会文化財保護課「しまなみ水軍浪漫のみち文化財調査報告書—石造物
 編—」 愛媛県教育委員会 二〇〇二年三月
- (29) 佐藤昭嗣「西國寺の中世石造塔婆」(『尾道西國寺の寺宝展』 広島県立歴史博物館 二〇〇二年一月)
- (30) 八幡浩二「中世「尾道」における都市の成立と展開」(『考古学研究』第五〇巻第四号 二〇〇四年三月)